

## グループ学習を促進するチームづくりの個人への影響 —心理的安全性に着目して—

### The Impact of Team Building for Promoting Group Learning on Individuals -Focusing on Psychological Safety-

三井 規裕

Noriyasu MITSUI

桃山学院大学

Momoyama Gakuin University

Email: nmitsui@andrew.ac.jp

**あらまし**：本研究の目的は、グループ学習に対して学生が感じる心理的な負担感を軽減するワークを導入し、どのような影響があるかを検証することであった。アンケート調査の結果、第1回授業よりも第15回授業において懸念測定尺度の平均点は低下していた。また、自由記述を確認したところ、第1・第2回で実施したワークや教員の初期の態度が学生の負担軽減に寄与していたことが示唆された。

**キーワード**：心理的安全性、グループ学習、チームづくり、負担感の軽減

#### 1. はじめに

大学教育で実践されるグループ学習には、Problem/Project Based Learning (以下、PBL)、協調学習、協同学習等の方法がある。一方向的な知識伝達の授業から学生同士のインタラクションを取り入れた授業への移行が大学教育で進んでおり、学生の能動的な学びを促進することが期待されている。しかしながら、必ずしもその期待に応える成果を得られていない現状が見られる。

#### 2. 先行研究と本研究の目的

グループ学習を実践しても、学生の能動的な学びの姿勢が十分に変化していない。例えば、学生同士のインタラクションを取り入れた授業に、大学生が接する機会は増えているにもかかわらず、学生はますます学習に対して受け身で消極的になりつつあること、学生は教員に対しグループ学習等に参加しやすいよう工夫を求めていること(近田・杉野, 2015)が報告されている。また、亀倉(2016)は、グループで学習を行わせようとした時、グループ内で雰囲気が悪化し、グループでの学習が進まないことがあると述べている。さらに、PBLの取り組みを行っても、学生によっては活動に関わろうとしないことがあると報告されている(中部地域大学グループ・東海Aチーム, 2014)。この背景には、大学入学前までの慣れ親しんだ一方向的な授業から変わることや他者との信頼関係がない中で、授業に積極的だと思われるような行動を授業でしたくないという、他者からのまなざしに対する心理的な負担感があると考えられる。

そこで、本研究では、対人関係におけるリスクを取ることができる状況である心理的安全性(Edmondson, 1999)に着目する。その上で、学生がグループ学習に対して感じる心理的な負担感を軽減するワークを導入し、どのような影響があるかを検証

することを目的とする。

#### 3. 実践概要

本研究で対象とする実践は、A大学において2023年度秋学期、2024年度春学期・秋学期に全学部全学年対象(選択科目)に開講された少人数型の授業である。毎回4~5名のグループになり、教員の説明を聞きながら、学生同士で学ぶ授業である。研究目的から、授業初期に学生が感じている心理的な負担感を軽減するため、教員を含めた授業参加者の関係性を作ることを意図した場づくりを行う。対象の授業では、第1回と第2回の授業でグループ作りのワークを実施する。身体を動かしながら緊張をほぐすアイスブレイク、初対面の人が多いグループにおいてコミュニケーションを促進するワークを実施する。こうしたワークはその後の授業内容と関連のあるようにし、振り返りを行い、単に楽しんで終わったとしないようにする。

#### 4. 調査・分析方法

調査対象は授業を受講した学生90名である。学生が感じる心理的な負担感を把握するため、懸念測定尺度(津村, 1983)を使用し、第1回授業終了後(以下、事前)と第15回授業終了後(以下、事後)にアンケート調査を実施する。懸念測定尺度は4つの下位尺度からなる。受容懸念は、自分がグループのメンバーを受け入れられるか、メンバーに受け入れてもらえるかを、データの流動的表出懸念はメンバーの考え方や態度等に関する不信頼に由来し、学習活動の中でどのように感じているかを、目標形成懸念は、グループでの活動において目標が明確でなく共有されていない状態を、社会的統制懸念は、特定のメンバーの影響が強く相互に影響し合っている実感が乏しいことを表す。各3項目の設問で構成されており計12項目からなる。また、教員の行った授業中

の行動や対応を学生がどのように感じていたかを明らかにするため、自由記述（この授業において、教員のどのような行動があなたやグループにどのような影響を与えていたと思いますか？率直に記述してください）の回答を求める。

分析対象は、調査に協力をしてくれた76名（男性50名、女性26名、回答率84.4%）である。履修当時の学年は1年生12名（15.8%）、2年生23名（30.3%）、3年生31名（40.8%）、4年生10名（13.2%）である。分析方法は、アンケート結果を使用し、平均の差の検定を行う。また、個人の変化を分析するため効果量を算出する。

## 5. 結果とまとめ

懸念測定尺度の全ての下位尺度の平均値が事前よりも事後において低下した。対応のある  $t$  検定の結果、有意な差があるといえ、効果量  $d$  も中程度であった（表1）。このことから、全体的な傾向として学生の心理的な負担感は低下していたといえる。

表1 対応のある  $t$  検定の結果

下位尺度	時期	$M$	$SD$	差の95% 信頼区間		$t$ 値	自由度	$p$ 値	効果量 $d$
				下限	上限				
受容懸念	事前	3.08	1.15	0.16	0.95	2.80	75	**	0.46
	事後	2.52	1.24						
データの流動的 表出懸念	事前	3.25	1.43	0.24	1.10	3.13	75	**	0.52
	事後	2.58	1.14						
目標形成懸念	事前	2.70	1.14	0.18	0.90	2.97	75	**	0.49
	事後	2.16	1.08						
社会的統制懸念	事前	3.65	1.17	0.43	1.22	4.17	75	***	0.68
	事後	2.82	1.31						

$N=76$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

個人の変化を分析するため、対象者ごとに事後得点から事前得点を引いた差得点を用いた。その後、差得点の平均値と標準偏差を使い、平均値を標準偏差で除した効果量を算出した（南風原, 2014）（表2）。なお、懸念測定尺度は、心理的な負担感や不安が軽減されると事後の数値は小さくなることから、差得点はマイナスを表すことがある。

表2 懸念の差得点の記述統計と効果量

	平均値	標準偏差	効果量 $d_D$
事後-事前（受容）	-0.55	1.52	-.36
事後-事前（データ）	-0.67	1.44	-.46
事後-事前（目標）	-0.54	1.14	-.48
事後-事前（社会）	-0.83	1.47	-.56

$N=76$

差得点の効果量  $d_D$ （大久保, 岡田, 2012）は、-.36 ~ -.56 であった。この結果から、事後において懸念測定尺度得点の低下が一部の学生に限られているのではなく、多くの学生で見られ、グループ学習に対

する心理的な負担感が軽減していたと解釈できる。

自由記述を確認すると「みんなで議論するときには本音を伝えやすい状況が多かった印象があります。おそらく●●先生が授業の最初の方に行った、アイスブレイクが関係していると考えました」や「○○くんとか○○さんというような呼び方ではなく、ニックネームを覚えて呼んでくれたりしたので緊張感が和らぎ、授業が楽しくなりました。（中略）学年が違う人が多いですが、先輩後輩の関係でありながら、友達のように接していただいて、居心地が良かったです」との記述が見られた。

これらのことから、グループ学習の初期において、学生がグループ学習に感じる心理的な抵抗感を軽減する取り組みを実践することは、グループ学習を円滑に進める上で、一定の影響があると考えられる。

## 6. 今後の課題

今後は学生の心理的な負担感を考慮していない授業を対象に調査を行い、どのような違いがあるかを検討する必要がある。

## 謝辞・付記

本研究の一部は、JSPS 科研費 JP24K06245 の助成を受けたものである。また、本研究は、三井ほか（2024a・b）の成果に分析を加え発展させたものである。

## 参考文献

- 近田政博, 杉野竜美: “アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識: 神戸大学での調査結果から”, 大學教育研究, 23, pp.1-19 (2015)
- 中部地域大学グループ・東海 A チーム: “アクティブラーニング失敗事例ハンドブック: 産業ニーズ事業・成果報告”, 一粒書房, 愛知県 (2014)
- Edmondson, A. C.: “Psychological safety and learning behavior in work teams”, Administrative Science Quarterly, 44, pp.350-383 (1999)
- 亀倉正彦: “失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング”, 東信堂, 東京都 (2016)
- 南風原朝和: “統・心理統計学の基礎-総合的理解を広げ深める”, 有斐閣, 東京都 (2014)
- 三井規裕, 小林珠子, 榎井亜依, 鈴木小春, 林玲穂, 星愛美, 長内遥香: “学びの場づくりが学生の抱える不安の改善にどのように影響するか-学生の自由記述に着目して-”, 日本リメディアル教育学会 2024年度中国・四国支部大会 (2024a)
- 三井規裕, 小林珠子, 榎井亜依, 鈴木小春, 林玲穂, 星愛美, 長内遥香: “心理的安全性を考慮したグループ学習型授業が学生の学びに与える影響”, 日本教育工学会研究報告集, 2024, pp.296-299 (2024b)
- 大久保街亜, 岡田謙介: “伝えるための心理統計-効果量・信頼区間・検定力”, 勁草書房, 東京都 (2012)
- 津村俊充: “T グループの発達過程に関する研究 (II): Bradford の学習機会と Gibb の懸念について”, 南山短期大学紀要, 11, pp.57-80 (1983)